

## 第二章 永遠の生命

### 一 永遠の生命は修行中どういう時に得られるか

生き通しの生命、これは修行中どういう時に得られるものであるのかという事に就いてお話しいたしとう  
ございます。

釈尊が私共にお与え下さいました理想は、涅槃と菩提であります。仏道と申しますと、この涅槃と菩提と  
を得る道であります。涅槃と申しますと、永遠の生命と常恒の平和とであります。すなわち「永生樂果」で  
あります。この所を『觀經』玄義分には、

開示長劫之苦因、悟入永生之樂果。(長劫之苦因を開示し、永生の樂果に悟入せしむ)  
とあります。菩提と申しますと、完全の靈格であります。

常恒の平和と申しますと、どんな事があつても、いつもいつも平和と喜びに充ち満たされている事ができる。それを常恒の平和と申します。八風にも動かされる事のない心、例えば人から悪口言われましても、自分では自分の悪い所に気が付かない。お蔭様で自分の悪い所に気が付かせて頂きましたと、心の中では手を合わせて拜んでおります。また時としては株が暴落して今日の生活にも困るというような時でありましても、決して悲観したりしません。このようにどんな事が起こりましても、どのような場合にも、いつもいつも平和な心でいる事ができるようになりました。処を常恒の平和と申します。

お念仏は涅槃と菩提とを得る道であります。それではお念仏中に、どういう時に永遠の生命が得られるのかという事に就いてお話しいたしとうございます。法然上人のお歌に、

われはたゞほとけにいつかあふひくさころのつまにかけぬ日ぞなき

というお歌があります。法然上人様は日々六万遍、七万遍のお念仏をしておいでになったという事でありま  
す。私共は一時間お念仏いたしましても四千遍程しかできません。木魚を叩いて申しますと、三千遍程しか  
申せません。法然上人は歳をお取りになつてからは、日々七万遍お念仏申されました。

でありますから、そのために朝も早くから起き、夜も遅くまで念仏されたこと明らかであります。法然上  
人様はお念仏申しております時、どういう事を願つてお念仏申しておられたかと申しますと、ちょうど葵の  
蔓が木からんで離れぬように、いつもいつも如来様にお会い申したいという事を心にかけてお忘れ申した  
ことがないというお歌の意味であります。葵草と申しますのは、歌でありますから「あふひくさ」と、草に  
かけてお詠いになつてるのであります。葵草には、蔓の出るのと、蔓の出ないのと二種類あります。この

場合蔓のある葵草の方を指していること明らかであります。ちょうどその葵草が木にからみついて離れぬように、たとえ他の事は心にかけないことがあつても、如来様にお会い申したいという事を心にかけてぬ日とてないという意味のお歌であります。

人間でありますと、徳の高い人には会いたいと願わざるを得ません。美術でありましても、その道の達人が描きました絵を見ますと、実にその何とも言えない美的情操を感じてよい気持になります。文展でありましても、二科展でありましても、巧みな美術家が描きました絵を見ますと、よい気持になります。でありますから展覧会が上野の美術館で開けますと、私共随分遠方から見に参ります。彫刻でありますも、やはりそうであります。名工の彫刻を見ますと、私共の美的情操が満足せられます。幾度か見とれていられるうちに、自分が美化されます。そのように徳の高い人に会いましただけでも心地ようございます。それと反対に悪人に遭えばゾツとします。徳の高い方には、たびたび会いましますうちに、その方の人格的感化を得る事ができます。ですから、今現に孔子様のような方がおいでになれば、きつとお慕い申すに違いありません。釈尊が、今の世に生きておいでになるのであつたならば、遙々尋ねて行つてお目にかかりたいと願わざるを得ません。私共、弁栄聖者御在世当時は実にその心をもつて弁栄聖者をお慕い申しました。

まして、如来様と申せば、実にもう一切の産みの親様であらせられます。救いの親様であらせられます。教えの親様であらせられます。万徳をお具えになつていらつしやいます。私共の本当の親様であります。私共銘々を一人子とみそなわして、御自身の全きがごとく全きものとしてやろうとして、そのための御活動絶え間なくあらせられます。実に智慧と慈悲に在ますのが如来様であります。そのような尊い大慈悲の如来様

にお遇いできるものならば、お遇いしたいと願わざるを得ません。万徳円満であらせられる如来様は、実に私共の本もとの親様であります。お遇い申したいと願わざるを得ない。親様は遇うてやりたいと思し召してお遇い下さいます。お遇い申しただけでもどんなに結構な事でございます。尊いお光明をもつてお照らし下され、私共の心霊を生かして下さる最尊第一の親様にお遇い申したいと願わざるを得ません。如来様の光明中の身とならせて頂けるならば、実にもうどんなにか結構でございます。お遇い申したいとお慕い申せばきつと叶えて下さいます。このお願いの叶いました喜びをお詠いになった法然上人様のお歌に、

阿弥陀仏と申もつすばかりをつとめて浄土の莊嚴見るぞうれしき

というお歌があります。浄土の莊嚴と申しますと、嚴かで尊く麗しいことであります。莊嚴とはどういう莊嚴であるかということ善導大師様はお示し下さいました。莊嚴には依報莊嚴、正報莊嚴の二種あるとお示し下さいました。依報莊嚴にはまた三種あるとお示し下さいました。地下ぢげの莊嚴と、地上の莊嚴と、虚空の莊嚴であります。正報莊嚴にはまた二種あると仰せになりました。主莊嚴と聖衆莊嚴とであります。聖衆莊嚴と申しますと、勢至様、観音様等であります。こういう尊い方がおいでになりますので、お浄土が嚴かで麗しいのであります。主莊嚴と申しますと、如来様であります。如来様がおいでになりますから、聖衆達がそうらせて頂く事ができたのであります。如来様は御主人様であります。最も尊い大切な方でありま

す。

法然上人様は「阿弥陀仏と申ばかりをつとめて云々」と、お詠いになりました。皆様の内には「死んでから後、浄土の莊嚴を見るのがうれしいと言われたのではないか。お念仏は未来への希望である」とおつし

やられる方がおいでになるかも知れませんが、そうでありましたら「見むぞうれしき」と言われるはずであります。けれども法然上人様は「見るぞうれしき」と仰せになつておられます。それでは「見むぞうれしき」といふべき所を「見るぞうれしき」と書き違えたのではないかと言われる方があるかも知れません。けれども上人様は歌人として押しも押されぬ歌の達人であります。字を間違えるなどということある訳ありません。でありますからこの歌は未来への希望ではなく、御経験の事実をお詠いになつたのであるということ明瞭であります。「浄土の莊嚴を見てうれしき」という意味であります。

如来様にお会い申せば何故有難いのかと申しますと、先程も申しましたように、人でありましたも徳の高い人にたびたび会えば心地ようございます。まして如来様のように尊い方にいつもお会い申しております。ませば、どんなに楽しい事でありましょうか。私共が三十年五十年お念仏して死んでから後に、お浄土に往生して仏に遇うというだけでありますならば、真劍にお念仏する事できません。昔から「死人に口なし」と申します。死んでからでなくては仏にお会い申す事できないというのでありますならば、一体何をもつて証拠とするのでありましょうか。私共がお念仏申しますのはこうしてお念仏しておれば、三十年五十年の後、死んでからお浄土に参れるというのでお念仏しているのではありません。称える一声一声に涅槃の世界に近寄らせて頂いているのであります。そしてお念仏の功が積れば、必ず現身にも涅槃界に到達できて永遠の生命と常恒の平和に目覚めさせて頂き、浄土の莊嚴をも見させて頂けるのであります。法然上人様は如来様にお会い申してこういう喜びを得たということをお洩らしになりました一つに、

我本因地 以<sup>レ</sup>念<sup>フ</sup>仏<sup>心</sup>、入<sup>ル</sup>無<sup>生</sup>忍<sup>心</sup>云々 十二月十一日勝法御坊 源空

とお示しになりました。これは勝法御坊という絵の上手なお弟子が、ある日、法然上人様の御姿をお写し申して上人様の所にもつて参りまして「どうか御署名下さい」と申しますと、法然上人様は水を汲んで来られて、その水に御自身の顔をお写しになって、似ていない所をお直しになり、その時は何ともお書きになりました。喜んでしたが、二度目に勝法御坊が書き直して持つて参りますと「我本因地云々」とお示しになりました。これは『首楞嚴經』の文句でありますが、「源空」と書いて、この言葉をもつて自讃となされたのでありますから、これは法然上人御自身の事であること明らかであります。「我本因地」自分のもと修行中に「念仏心を以て」。念仏心とは法然上人のお歌の「われはたゞ云々」というお歌の心であります。その念仏心をもつて「無生忍に入る」。限らない生命を我が物とすることを得たぞという意味であります。限らない生命が頂けませば、もう顔を青ざめて恐れるというような事ありません。また顔を真つ赤にして怒るなどという事ありません。顔を赤くして怒るようでは忍ではありません。また悲観するなどという事、また目をまらまをこ皿眼にしてびつくりするなどという事ありません。でありますから忍であります。無生忍の無生とは『大原問答』に「往生は無生」と言っておられます。永遠の生命を得れば生まれる事、死ぬ事もあります。でありますから無生であります。無生忍を得たとは永遠の生命が得られたことでもあります。永遠の生命が得られない以前は露の命が我が命であります。やがて死ぬべき命であります。如来様にお会い申した時が永遠の生命が得られた時であります。

現在生きていらつしやる如来様にお会いできるようになりましたら、その如来様をお慕い申し、いつもいっつもお離れ申さないようになって、口には南無阿弥陀仏みなと聖名をお呼び申しております時、その心の実

質内容が永遠の生命であります。そうでありますから、こうして五日間お念仏申して如来様にお会い申したいという願いをもつてお念仏申さねばなりません。鎮西上人様も「如来様にお会い申したいという願いをもつてお念仏申すのでなくては百日経つても修行成就しない」と言っておられます。初めは三日月程お光明を頂きます。それから四日月、五日月というように段々と頂けます。三日月程でありまして、それはもう永遠の生命であります。

けれども、皆様の中には「我々凡夫には如来様にお会い申す事などはとてもできない」と言われる方があられるかも知れません。こう申しますのは皆様だけではありません。学問をした偉い学者などにも私さんざん言われました。これは日本人特有の考えであります。昔から禁裏様を見ると目が潰れると言っております。そのようなやんごとなきお方にお会い申すと眼が潰れるというのは昔からの習慣であります。これは古来まことに結構な日本の美風であります。日本国民として上を敬い尊ぶという心、まさに斯くあらねばなりません。しかし、如来様は私共の本もとの親様でありますから遇つて下さいませ。如来様にはお目にかかることができます。善導大師のお言葉に、

但使一切凡夫傾心定有見義。(もし一切の凡夫心を傾ければ定んで見の義あり)

と言っておられます。「見」と申しますと前後の關係上「見仏」であること明らかであります。どんな凡夫でも如来様にお会い申したいと一所懸命になれば、きつとお会い申せる訳があるというお言葉であります。その訳とは大誓願力・三昧定力・本功德力等の御力を如来様がお与え下さるからであります。凡夫の力でありますならば、とても駄目であります。けれども、どうか如来様にお会い申したいとお願い申しますと、如来



様の御力でお遇い申す事ができるのであります。善導大師様は御自身御体験の事実をお書き下さったのであります。經文を読んで多分そうだろうというような想像をおっしゃったのでありませんことを法然上人様しつかりとお書き下さっております。でありますから、どんな結構な、どんな偉い方が何と申しまして、この事に間違いありません。善導大師様、法然上人様程尊い方ありません。でありますから少しもお迷いなく信じてよいのであります。

法然上人様が「われはたゞほとけにひつかあふいくさ云々」とお示し下さいましたように、如来様にお遇い申したい願いをもつてお念仏いたせば、如来様の御力できつとお遇い申す事ができます。如来様を見奉ること初めはできませんでも、元々私共の真正面に居て下さるのが事実でありますから、そこに居て下さると思つて、一心に南無阿弥陀仏と申すがよいのであります。弁栄聖者は言つて下さいました。私共子供達が親様をお慕い申して一心に南無阿弥陀仏と申す声は、如来様は大宇宙を身とし心とし給う方ではありますが、また宇宙の最高中心に、こちらに本尊様（三昧仏を指し）としてお写し申してありますような人格的御体をお示し下さいまして、私共の真正面に居て下さいます。そこに居て下さいまして、私共の南無阿弥陀仏という声をお聞き下さいます。

元々如来様は真正面に居て下さるのが事実でありますから、私共が南無阿弥陀仏と呼び申す声は如来様の広大な慈悲の御胸に響いて、慈悲の毗まなびりをお注ぎ遊ばされて下さいます。初めは如来様の聖容みかおは見奉る事できません。慧眼、法眼開けなければ如来を見奉る事できません。けれども、初めは見奉る事できませんでもよろしゅうございます。親様はそこに居て下さると思つてお慕い申し、口には南無阿弥陀仏と申せばよ



いのであります。

また如来様の慈悲の聖容をお憶い申すという事でできません方は、本尊様としてお祀り申してあります如来様の聖容をしげしげとお見つめ申し、首の痛くなるまでもじつとお見つめ申してお念仏申すがよいのであります。如来様は在さざる処なく、みそなわさざる処なく、知ろし召さざる処なきお方様であらせられます。でありますから、如来様はあの御絵像の所に一つになっていて下さいます。私共が礼拝いたしませば、あの御眼をもつてみそなわして下さいます。私共が南無阿弥陀仏と申します声は、彼処に在まして聞こし召していて下さいます。如来様をお慕い申す心は、彼処で知ろし召していて下さいます。私共が如来様をお慕い申し、お念じ申します時、決して片思いではありません。よく片方は一心に思っているのに、片方は少しも思っていないことを「磯の鮑あわびの片思い」と申します。けれども、私共が如来様をお慕い申します時、決して片思いではありません。私共が如来様をお慕い申し南無阿弥陀仏とおすがり申します時、如来様は幾倍か私共をお憶い下され御愛いっくしみ下さいます。「我が教えを護つてよくやるぞ」と思し召していて下さいます。決して片思いではありません。

私共が御絵像の所に如来様在ますと信じてお慕い申しお見つめ申してお念仏申しております時、時としてトロトロと眠くなることを感じることがあります。その時心を引き締めてじつと如来様をお見つめ申す時「あら」と不思議に感ずることがあります。「あの如来様は御絵像ではなかった。本当に生きて在ます如来様であった」と気付くようになります。トロトロと眠く感じますのは只の眠りではありません。三昧の心が起こった時であります。けれども、未だ三昧の心が不純でありますから、眠く感ずるのであります。でありますか

ら、その時如来様の聖容はぼんやりと拝せられます。その時気を引き締めてじつとお見つめ申す時三昧の心がはつきりしてまいります。その時生きた如来様を見奉る事できます。その時如来様を見奉った眼は法眼であります。けれどもトロトロと眠くなった時油断をしてそのまま放つて置きますと本当に眠つてしまします。

もうこうなつてまいりますと白い壁の所などを見ます時、そこに如来様の慈悲の御相好を拝する事ができるようになつてまいります。またこんもりと茂つた森でありますとか、また山などを見ます時、森一杯の大きさに、また山一杯の大きさに如来様の御相好を拝する事ができるようになつてまいります。それはお浄土の如来様であります。「単なる記憶だ」などと思つてはいけません。お浄土の如来様がその御相好をもつてお遇い下さつたのであります。「けれども如来様はにっこりともして下さらないではありませんか。御説法一つして下さらないではありませんか。それをどうしてこれが生きたお浄土の如来様だなどと思えましようか」とおっしゃる方もおいでになるかも知れません。けれどもこれはまだ私共の心が幼少でありますためにそう思われるのであります。

赤子が生まれました時、未だ生まれただばかりでありますと物も碌々見る事できません。音も確かに聞く事できません。ただぼんやりとした明るみを見るとか、暗闇を見る事しかできません。けれどもお乳を頂いて段々お育てを頂きますと、耳もはつきり聞く事ができるようになつてまいります。けれども最初からこの方が自分にとつて一番いい方であるなどということ分かりません。けれども、お乳を頂いてお育てを蒙りますうち記憶もできてくる。二度目にお母さんの顔を見る時識別ができるようになってまいります。そして二度三度とお母さんの顔を見るようになってまいりますと、にっこり笑うようになってまいります。けれどもお

母さんの慈悲深い臍は「お母さんという方は一番いい方だ」と分かるより以前から自分に注がれていたの  
あります。ただこちらが幼少でありますために、それが分からなかつたのであります。

そのように如来様は元々私共の真正面に居て下さつて慈悲深い御臍をお注ぎ遊ばされて下さいませ  
けれども、こちらが幼少でありますから分かりません。けれども、心に拝めます如来様はお浄土の如来様であ  
りますから、その如来様とお離れ申さないように、いつもいつもお慕い申してお念仏する事が大切でありま  
す。聖歌「念仏七寛支」の中に、

弥陀みだつの身色紫金にて 円光徹照したまへる 端正無比の相好を 聖名を通して念おもほへよ

總すべの雑念みだる乱想ごころをば 排ひらきて一向如来ひたすらみほとけに 神ごころを遷うつして念おもずれば 便すなはち三昧成ずべし

というお言葉があります。「神を遷して念ずれば 便はち三昧成ずべし」の「便はち」は郵便の便の字が書い  
てあります。「便はち」とは「たちどころに」という意味であります。そのようにして心にお迎え申す事ので  
きた如来様といつもお離れ申さないようにしてお念じ申しておれば、たちどころに三昧成就するといふ意味  
であります。そのようにして一心に修行してまいりますうちに靈感極まりなきを感じるようになってまいり  
ます。そうなれば、もう如来様は本当に生きておいでになる如来様であるといふことに何の疑いもなくなつ  
てまいります。もう此処までくれば結構であります。それからますますお育てを蒙りますと、今度は如来様  
の御心をお示し下さいませ。如来様の御心とは大慈悲と大智慧とであります。

如来様のお育てを頂くのに段々階段があります。如来様のお光明を頂きます前一步という所に光や、明相  
をお示しになることもあります。これは明相を拝むとは決してはおりませんが、拝む方もあります。これは

如来様がお示し下さいますもので、「もう一步の所だから励め」というお知らせであります。錢程の朗かな朗かな透き通った光を見ますとか、また初めはその光が暗うございます時は「罪があるから懺悔せよ」との如来様のお示しであります。一心に懺悔いたしておりますうちに段々明るい光と化して来るというように、また太陽のような大きな光を見ますとか、また一面に輝く光を見ますとかいう事もあります。

京都帝大の機械工学科の教授をしておられました中井常次郎さんは弁柴聖者にお付きしてお念仏なさるようになられました。中井先生はお考えになりました。「お念仏することとは自分の人格を磨くことであるから、自分の人格が向上すれば、生徒に及ぼす感化も違ってくることであるから、自分がお念仏のために休暇をとって修行することとは意義のあることである」とお考えになりました。大学で年に何日か賜暇が取れるそうであります。その休暇の間を全部お念仏に使う事になり、お念仏会のある機会をはずさず参加なさって修行なさいました。そのようにしてその年は三日、あるいは五日というようにして五回程お別時に参加なさいました。その年の十二月、一心にお念仏しておいでになりますと、笹の葉がスツスツとしておりますその笹の葉の所に朗らかな赤や青の光をもった玉が点彩されているのを御覧になりました。これはやはり明相であります。明相と申しますと正しくのお光明ではありません。光明相ということでありまして色光であります。正しくのお光明が頂けます前一步の所で如来様がお示し下さるものでありまして、「もう少しの所であるから励め」という如来様のお示しであります。

それで一心に修行を励みまして、いよいよお光明が心に頂けた時、お浄土に生まれることができた時であります。

最初、如来様は感覺的啓示をお示し下さいます。次に写象的啓示、理想的啓示というように段々お育てを蒙ります。感覺的啓示と申しますと、如来様の相好が拝めますとか、結構な何とも言えない良い香が感ぜられますとか、また何とも言えない結構なものが身体に触れるのを感じますとかいうのを申します。写象的啓示と申しますと、如来様の御心をお示し下さることあります。如来様の御心とは大慈悲と大智慧とであります。

理想的啓示と申しますと、このようにして修行してまいりまして、遂に法身と合一させて頂いた所でありまして、無生忍を得た時であります。如来様のお光明が心に頂けませば、もう何の疑いもありません。けれども未だ目覚めませんうちは、永遠の生命が在るのかわからないのが問題となります。でありますから、これから少し事実の上から真実の自己ということに就いて御一緒に考えさせて頂きとうございませす。スピノザ (Baruch de Spinoza オランダ 1632～77) は「宇宙の本体は理性によつて推論せられる」と言っています。しかし『瑜伽論』には「事実と首つ引きでチラとばかり掴まえることができる」とあります。

## 二 永遠の生命 (真実の自己) に対する諸説

もつとも永遠の生命と申しまして、これに関していろいろな説があります。この事に就きまして少しお話し申しておきとうございませす。いつも申します事ではありますが、ある方は永遠の生命とは、何か非常に善い感化を残しますと、その感化は後世を照らすものである。でありますから、たとえこの身体は死んでも、その人の残した善い<sup>いさおし</sup>點は後の世を照らし永遠に滅びることがないと申します。この感化の光は滅びることの

ない生命だというようにこの永遠の生命を考えているお方もあります。

またある方は永遠の生命とは、研究を怠らず改善しつつ常に向上進歩して生きて行くことが永遠の生命だと申しております。でありますから、その永遠の生命というものから申しますと、生命ということ価値、値打ちという方から永遠だといっている訳であります。この一本の花を「ああいう活け方をしたんでは花が死んでいる」というように、生命ということを価値の方から見ているのであります。すなわち、研究を怠れば死んでいるんだというのでありますから、全く値打ちの方の生き死にであります。

またある方は子供はもと自分の身体の一部分である。その自分の身体から分かれたその子供が、また子孫を残します。でありますから、子孫が栄えて行くことは、畢竟自分が滅びないゆえんだということを永遠の生命と解している人もあります。米国あたりに参りますと、そういうふうを考えている人があります。一往聞きますとなるほどと思われます。しかし、価値という方面から申しまして、子孫が栄えて行くという方面から申しまして、結局いつまで続きましようか。私共人類もやがて滅びる時がやって参ります。地球もやがて壊れ去る時がきつとやって参ります。

しかし、ある文学者は言っております。シェークスピア (William Shakespeare 1564~1616) のような立派な芸術は永遠である、と言っております。なぜかと申しますと、シェークスピアのような偉大な芸術はこの世における芸術価値と、もしこの地球が破壊してしまつて、新たにできた星に人類が生まれ、その世にシェークスピアの芸術が現れるならば、その世におけるシェークスピアの芸術価値とは相等しい。であるから、この地球が破壊してもシェークスピアの芸術は破壊さるべきものでない。これがシェークスピア



アの芸術が永遠である証拠である。実にシェークスピアの芸術のごときはいかなる世においても同じである、偉大であり得る、と言っている文学者があります。いかにもその通りでありまして、その事実を疑う者はありませんと思われまます。

そういたしますと、宗教家から異論が出ました。シェークスピアの芸術のその意味での永遠は事実と信じられるけれども、しかし、これをもって世尊の説かれた、また宗教でいう永遠と一緒にすることは断じてできない。シェークスピアの芸術に就いていう文学者の永遠という位のものであるならば、我々凡夫の生命もまた永遠ということになります。私共は生まれ変わり死に変わりして六道輪廻しております。宗教でいう永遠ということは「在り通していつも変わらぬ」という意味であります。シェークスピアの芸術は在り通してはありません。出たり引つ込んだりするものであります。いつも変わらぬ在り通しということできません。

このように永遠の生命に関する説がたくさんありますが、今一つ一つ全部を並べる必要もないと思ひますが、もう二、三この事に就きましてお話し申し上げておくことも無駄でないと思ひます。

そういたしますと、これは幾度か申し上げた事でございますが、私共この身体が生きている間は脳髓と密接に結び付いております「意」というものがあります。それが魂であつて、この身体が死んだ時、離れて行きます。その意が死なない我、永遠の生命であるというように解している人もまた少なくありません。しかし、意は永遠の生命ではありませんこと申すまでもありません。仏教ではこれを「末那識」と呼んでおります。末那識は生滅相続しているものでありまして永遠不滅ではありません。

次に仏教でいう「無明」を捉えて、それを永遠の生命、不滅の我と考えている学者もありますが、この無



明すなわち「盲目的に生きんとする意欲」を永遠の生命と解したりするのは間違っております。

またあるキリスト教の方には、この身体が死んでも死なない我は純粹意識だと言っている方もあります。また生長の家などでは、例えば一軒の家にだいぶ永く患って寝込んでいる人などありますと家中真つ暗になつてくる。しかるにその病気が治ると光明になる。長生きができる、という位の所を永遠の生命と言っております。このように永遠の生命ということに就いて種々説がたくさんあります。でありますから、今私が永遠の生命と申しますのはどういうものを指すのかということをお申す必要があります。そういたしますと、仏教で永遠の生命と申しますのは実在論上の永遠の生命ということでありまして、いつも変わらぬ在り通しの我、真実の我、大我ということであります。この大我が本当の自己でありまして、このたびお話し申します「真実の自己」であります。